

# さんしゃ Zapping

Vol. 33 No. 3 (通巻 191 号)

2018 年 12 月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumeai.ac.jp

<http://www.ritsumeai.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

---

## 〔 目 次 〕

### <全国規模学会開催報告>

「第 24 回社会福祉研究交流集会 in 大阪」を  
立命館大学茨木キャンパスで開催しました 石倉 康次 p. 2

日本学習社会学会第 15 回大会を終えて 柏木 智子 p. 4

### <院生自己紹介>

自己紹介 福井 優 p. 5

私と囲碁：プロの囲碁棋士から囲碁を研究する社会学研究科の院生へ KIM Nahyun p. 8

### <エッセイ>

ジェンダーギャップと「地図が読めない女」の関わりから思うこと 竹内 謙彰 p. 12

## <全国規模学会開催報告>

### 「第24回社会福祉研究交流集会 in 大阪」を

### 立命館大学茨木キャンパスで開催しました

石倉 康次

8月25日と26日にかけて、本学茨木キャンパスを会場として、第24回社会福祉研究交流集会 in 大阪を開催させていただきました。700人近い参加者がありました。開催に際して立命館大学および産業社会学会から助成をいただき、クレオテックの職員さんには開催前からいろいろお世話になったことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。この学会は、社会福祉各分野の研究者や福祉従事者・事業者、当事者の個人会員約千人、およそ100の団体会員によって共同で組織されたものです。年に1回、関東、中部、京都、大阪を巡回して開催されてきました。

一日目の全体集会では、元文部科学省事務次官で夜間中学支援をボランティアで続けてこられた前川喜平さんに、「学習権と生存権」というテーマで記念講演をしていただきました。氏は「学習権」は自由権（自由に学ぶ）と社会権（国に対し教育の条件を整えることを求める）、平等権（誰もが等しく教育を受ける）、参政権（賢い主権者を作り上げる）を含む複合的な権利であると提起されました。続いて講演に立った、セーラー服歌人の鳥居さんは、「母の自殺後、児童養護施設で暮らすも虐待を受け、ホームレス生活に入り小学校を中退、拾った新聞で字を覚え短歌に出会い居場所を

見つけた」と話されました。また、「自分のように実質的な義務教育を受けないままに形式的に卒業とされた人が多数おり、その人たちが再度教育を受けられるよう文部科学省にお願いした。前川さんが在職当時に再度教育を受けることができるようにしてくださった。自分は大学に行きたい。形式卒業者を解決したいという意味でセーラー服を着ている」。「現在夜間中学には日本語を学びたい外国人も多く来ており、義務教育の学び直しをしたい人たちとはニーズが違っているのに一緒にのクラスになっており無理がある。なんとかしてほしい」。「虐待されていたけど家族は大好きだった。その家族がいなくなり何をやっているのだと、叱ってくれる人がいないのが寂しかった。図書館で短歌に出会ったことが、絶望からぬけだすきっかけになった。そのことを福祉関係者の人に知ってほしい」、と話をされました。

二日目は、①「福祉の専門性」、②「働き続けられる福祉職場」、③「住民本位の地域包括ケア」、④「東アジアの高齢化と社会福祉」、⑤「基礎講座：貧困の広がりに対して日本の社会福祉はどこまで対応できたのか」、⑥「『福祉のひろば』を通した総合的な福祉のまなび」の、各テーマ別分科会に分かれ関連報告

と討論等がなされました。私が、企画に関わった第4分科会では、内モンゴル師範大学の陳引弟さん（社会学研究科のOG）「中国における高齢化に対応した制度・政策の動向」、エセルモンドさん「少数民族の高齢化の現状と対策」、リー・チュンフィ「高齢化と社会福祉教育」の3本の報告がありました。①人口規模が巨大であること、②高齢化率の増加スピードが速いこと、③地域間の差が大きいこと、④まだ経済基盤が弱く、家族の経済扶養による高齢者が全国で47%、都市部でも30%近いこと、⑤高齢者の半数が小学校卒と学歴が低く、自立できる収入のない人が多いこと、⑥56の民族で構成され多文化であること、⑦2011年に「皆年金」「皆保険」「高齢者養老サービス」の構築に重点をおいた計画が実施されたこと、⑧近年は、高齢者のみの居住が広がり、都市部を中心に若い人の社会になってきていることも指摘されました。

次いで、金早雪さん（信州大学）より「韓国における高齢化の進展と『福祉革命』」について報告をいただきました。金さんは①開発独裁体制の後、1980年代から民主化がはじまり、生活保護法の改正、老人福祉法、心身障害者福祉法、公民年金の施行が開始された。②1980年代

から少子高齢化が超スピードで進んだ、③そして1999年国民基礎生活保障法が成立し、稼働能力や年齢は不問で「最低生計費」が保障された、④2014年の基礎年金法の改訂、⑤高齢者の社会参加の場としての「敬老堂」、食事提供や「老人福祉センター」などによる在宅福祉サービスが広がっている、⑥こうした福祉の構築は、開発独裁の経済優先政治から民主化と生活保障の国家パラダイムの転換でもあったと指摘されました。

報告や質疑の中では、日本も中国も韓国も、歴史的に、社会保障・社会福祉の代わりに家族的資源に多くを依存してきた点では共通していた。今日では、年齢差を超えた共生社会をどう構築するか、市場主義と商品化の進展の中で、いかにして弱者の尊厳を取り戻すか、新たな共同体をつくるために何をなすべきかという共通の課題がうかびあがっていることが確認されました。また若者世代の動向については、内モンゴルも韓国も日本もほとんど同じなのには驚きました。

（下の写真は、前川喜平さんとセーラー服歌人の鳥居さんとの対談場面。分数の足し算が難しかったことが話題になっている。）



# 日本学習社会学会第 15 回大会を終えて

柏木 智子

2018年9月1日(土)・9月2日(日)の両日にわたり、日本学習社会学会第15回大会を立命館大学衣笠キャンパスで開催させていただきました。日本学習社会学会は、生涯学習に関する実践的並びに理論的研究を促進し、研究の交流および情報交換等を行うことを通して、日本における学習社会の発展に寄与することを目的に、2004年4月に創設された教育関連の学術団体です。大会は、自由研究発表、課題研究、公開シンポジウムから構成され、約70名の会員に参加いただきました。また、公開シンポジウムは100名を越す方々にお越しいただきました。

大会初日に開催されました公開シンポジウム「困難を抱える子どもへの包括的ケアの実現と課題～今、改めて学校の役割を問う」では、竹内謙彰学部長に冒頭でご挨拶をいただきました。お忙しいところを貴重なご挨拶をいただき、心より感謝申し上げます。シンポジストとして、新海理丘(茨木市立郡山小学校校長)氏、上村文子(滋賀県スクールソーシャルワーカー)氏、盛満弥生(宮崎大学教育学部准教授)氏の3氏にお越しいただき、ご報告をいただきました。子どもの貧困をはじめ、子どもの抱える困難や不利に対して学校が、地域が何をできるのか、それらが協働しながら、子どもをどう支援し共生社会をつくるのかについて、有意義な示唆をいただきました。ま

た、質疑応答の時間には、多くの質問をいただき、活発な議論が交わされました。

自由研究発表件数は、22本となりました。6分科会に分かれ、二日間にわたって活発な議論が展開されました。内容は多岐にわたり、日本学習社会学会に相応しく幅広い調査研究発表がなされました。

課題研究では、I「学習都市の可能性」、II「高等教育における国際化の課題」が設定され、それぞれ大変興味深いご報告がなされました。Iでは、近年ユネスコが推進している「学習都市」(learning city)について議論が交わされました。世界中の都市が「持続的な学習都市」へと戦略的に変革していく重要性が提唱されていることを受け、学習都市に向けた取り組みを始めている岡山市を例に、先駆的な研究活動報告がなされました。IIでは、世界の多くの国々が国策として大学の国際化を進めている状況の中で、高等教育の役割を捉え直し、変革に向けた過程や手段についての意見交換がなされました。報告1では欧州の高等教育研究を、報告2では医学教育を、報告3では大学図書館からの報告がありました。会場には、それぞれの内容に造詣の深い会員が集まり、今後の学習社会を創造するための理論的・実践的報告と質疑応答で、非常に充実した時間となりました。

最後になりましたが、本大会の実施に際しまして、産業社会学会全国規模学会助成をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。産業社会学会の皆様のおたかなご支援により、大会開催に至

ることができました。また、共同研究室の職員のみなさまには大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。産業社会学会の今後の発展を祈念いたしまして、大会報告とさせていただきます。

## <院生自己紹介>

# 自己紹介

## 社会学研究科博士前期課程 2 回生

### 福井 優

立命館大学大学院社会学研究科博士前期課程 2 回生の福井優と申します。私は戦後思想史を専攻しており、修士論文では、評論家、加藤周一（1919-2008）の思想に焦点を当て、合理化による戦後日本の人間や社会の変容に対峙し続けた加藤が、その抵抗の拠点として、芸術的創造や芸術的感性、また日本の伝統的芸術に、どのような可能性を見出そうとしていたのか、を主題に、丸山眞男（1914-96）との比較を交えながら、その思想的営為を戦後思想史の中に位置付けたいと考えています。

もともと私は、立命館大学文学部で東洋史学を専攻していました。大学院に進学するに当たり、戦後思想史を研究したいと思い、戦後日本を研究対象とされている根津朝彦先生や福間良明先生がいらっしゃる社会学研究科に入学いたしました。ここでは、そのような経緯を述べて、自己紹介にかえさせていただきますと思います。

学部時代の私の研究対象は、前近代の中国の政治史でした。卒業論文では、南宋（1127-1279）の史彌遠という宰相が、25 年間にわたって独裁的な支配を確立

できた理由を探るということテーマに、その支配に朱子学がどのように関わっているのかを研究しました。前近代の中国では、儒教の経典等から出題される科挙を及第することで、士大夫官僚となることができたため、政治と思想との関係は密接であり、官僚制を研究する上でも、当該期の朱子学の内容や学派をおさえておくことが必要でした。そのような研究を進める中で、思想や観念が政治や社会に与える影響が非常に大きいことを知りました。それが、思想史に興味を持つきっかけとなり、また、思想から政治や社会を見る重要性を認識しました。また、ここで漢文の史料講読や、朱子学の知識を学んだことは、一見研究領域のかなり異なる戦後思想史を専攻するに当たっても、大きな財産となりました。なぜならば、そもそも丸山眞男の『日本政治思想史研究』（1952 年）が古典とされるように、日本思想史の起点は、江戸時代の伊藤仁斎や荻生徂徠、本居宣長ら近世の知識人達が、外来思想である朱子学を、どのようにそれぞれ解釈し、自身の思想を形成したかが問題となるためです。また、丸山や加藤周一ら戦後知識

人が、戦争体験や、戦後社会を生きる中で形成した問題意識を基に、徂徠や宣長をどう読み、日本思想史や日本文化史を構想したのか、という点も戦後思想史研究にとって、最重要のテーマです。以上のように、戦後思想史を研究する際にも、朱子学を学んでおくことは重要であり、学部時代の東洋史の研究が活きたと思います。

そして、私が戦後思想史を研究したいと思うようになった最大のきっかけは、学部1回生の時に、丸山眞男の著作に出会ったからでした。受講していた政治学の一般教養の講義で紹介された丸山の『増補版 現代政治の思想と行動』（未来社、1964年）を夏休みに読み、衝撃を受けました。まさに一読三嘆！特に巻頭の「超国家主義の論理と心理」（1946年）は、戦前の日本社会を覆った超国家主義の病巣を、快刀乱麻を断つが如く鮮やかに剔抉した論文で、人間の思想や精神構造を分析することにより、歴史的事象を明晰に説明してみせる丸山の手法に驚くと共に、思想史研究の迫力を感じました。しかし、まず何よりも私を魅了したのは、丸山の文体そのものでした。藤田省三は、丸山の文体を「従来の論文に見かけるような冗漫を排除して、極端に緊密なスタイルをとりながら、他方論文の中に西欧音楽的な構成的リズムと日本的雄弁の方法である講談の断片的文句を組み合わせて、持ちこんで来た。難しい中身の西欧音楽の高等講談のようなものができ上がった」（久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』中央公論社、1959年、156頁）として高く評価していますが、その流暢な「西欧音楽の高等講談」の底に常に感じられる執拗低音としての丸山の強い問題意識が、私を

強くとらえたのだと思います。

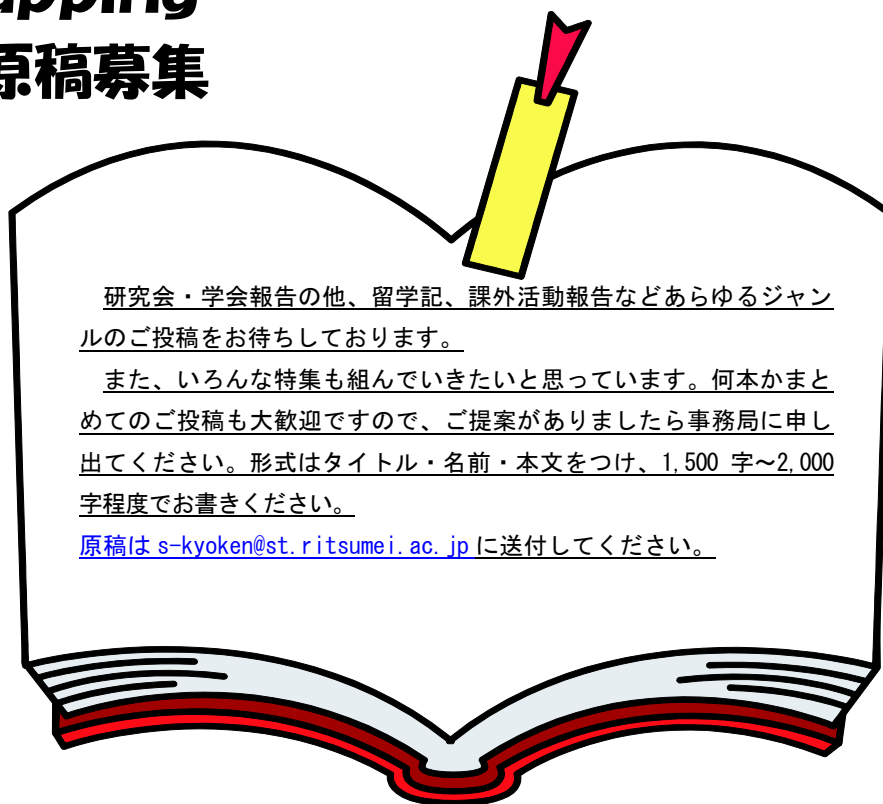
以後、丸山の著作を読んでいく中で、自然に行き着いたのが、加藤周一でした。加藤の『芸術論集』（1967年）、『日本文学史序説』（1975、80年）などを読み進めていく中で、加藤の感受性の鋭さや、芸術や文学に対する信頼の強さに気付くようになり、もともと映画や演劇を中心とする芸術や文学が好きで、それに強い関心を持っていた私は、加藤のそういった点に強く引かれていきました。その中で、丸山と問題意識を共有しながらも、加藤が独自の戦後日本社会の構想や、思想史・文化史研究を進めたのではないかと考えるようになり、加藤を研究対象にしようと思うようになりました。丸山や加藤らが追求した、政治権力に抵抗する確かな個人を前提とするデモクラシーを、戦後日本においてどのように作り出すかという問題は、現代の日本社会においても大きな課題であり、戦後思想史研究は、現代を考える上でも重要な意義を持っていると思います。また、近年、近現代の日本思想史研究においては、思想史とメディア史との架橋が課題になっています（「特集 思想史のなかの雑誌メディア」『日本思想史学』49号、2017年、1-29頁を参照）。そういった課題も念頭に置きつつ、今後も研究を進めてまわりたいと考えています。

最後に、もともと東洋史学専攻ということで、『論語』の一節を引いて、擱筆したいと思います。『論語』子罕第9に「子曰く、譬えば山を為るが如し。未だ成らざること一簣なるも、止むは吾れ止むなり。譬えば地を平にするが如し。一簣を覆えずと雖も、進むは吾れ往くなり（子曰く、学問は譬えば、山を造るようなものだ。あと簣に一杯の土で出来上る

ときでも、そこで止めたならその人の仕事は未完成のまま。学問はまた地面の凹みを埋めるようなものだ。箕に一杯の土をほうりこんで埋めただけでも、一歩進めば、その人一歩だけの進歩があったのだ」(宮崎市定『現代語訳 論語』岩波

現代文庫、2000年、146頁)という言葉があります。この言葉を胸に、箕に一杯ずつ土を着実に盛っていくことを大切にして、これからも研鑽を積んでまいりたいと思います。今後とも御指導御鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

## Zapping 原稿募集



研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字~2,000字程度でお書きください。

原稿は [s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp](mailto:s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp) に送付してください。

# 私と囲碁：プロの囲碁棋士から囲碁を研究する 社会学研究科の院生へ

社会学研究科博士前期課程 1 回生

キム ナヒョン

KIM Nahyun

私は今年から日本留学を始め、現在市井吉興先生の下で「レジャーアクティビティ（囲碁）を通じた高齢者の社会参加」というテーマで研究しています。いきなり「囲碁」が出てきましたが、囲碁というゲームをご存知でしょうか。私が4歳の時初めて囲碁と出会い、小1年に子供囲碁教室に通い始めました。小5年からはプロ棋士を目指した結果、17歳にプロになり、その後、韓国の明知大学囲碁学科を卒業しました。以上の経歴でも見られるように、私はずっと囲碁と付き合っ

て参りました。あの小1年の時、なぜ、自ら囲碁を選んだのかよく覚えていませんが、囲碁を打つのが楽しかったことと負けず嫌いだった性格の影響が多かったかなと思います。

みなさんにとって「囲碁」はどのようなイメージでしょうか。何か難しそうで、静的な大時代のゲームだと思いませんか。勿論、囲碁は長い歴史がある特にアジアを中心に広がった古いゲームです。韓国と中国では「琴棋書画（きんきしよが）」と言われる文雅の士の四つの遊びとして、昔の知識人の余暇活動でした。日本でも囲碁は昔から普及されていて、江戸時代に家制度・お城碁・碁所が誕生し、一種の専門棋士制度が定着したと言われて

います。と、囲碁がもっと古く感じられるかもしれませんが、実は最先端の技術とも関りがあります。2016年3月に行われたAIと人間の囲碁試合「Google Deepmind Challenge match アルファ碁：イ・セドル」は記憶に新しいです。なぜGoogleが囲碁を選んで、囲碁から何を証明したかったのかはここで扱わないですが、このイベントから人工知能がもっと世の中に知られたきっかけになったと思います

さて、現在の囲碁はどうなっているのでしょうか。日本を筆頭に韓国・中国の世界囲碁普及から西洋の国々でもレジャーとして楽しむ人が増えている一方、日・韓の中では、昔の名声を失いつつあることも現実です。その中、日本では囲碁を活用した様々な試みが行われています。私の日本留学のきっかけになったNPO法人日本福祉囲碁協会や町興し・町づくり活動としての囲碁祭り、またペア碁・ハンディキャップ碁の普及等に入っています。このような多様な試みが進んでいる中、今回は私が11月24-25日に参観してきた「大分囲碁祭り」の世界ハンディキャップIGO選手権に焦点を当てて、この試合から感じたことを話したいと思います。

大分囲碁祭りは第33回国民文化祭・



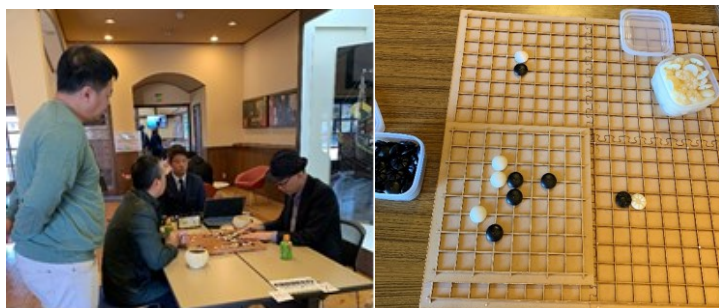
第 18 回全国障害者芸術・文化祭大分大会の一環として 11 月 23-25 日に大分県臼杵市で行われました。メインイベントとしては「世界ハンディキャップ IGO 選手権」と「プロアマオープン戦」があり、クラス別囲碁大会・子供クラス囲碁大会・囲碁のシンポジウムが並行して開催されました。その中、ハンディキャップ IGO は視覚障害者の囲碁を意味します。(個人的に「ハンディキャップ」という言葉が気に入らないのですが…) 世界ハンディキャップ IGO 選手権と言われているものの、日本・韓国・中国・台湾のアジアの選手 16 名を招請して行われました。年齢は 11 歳から 76 歳までバラバラです。

視覚障害者はどうやって囲碁を打つか気になる方もいらっしゃると思いますが、使う用品だけ少し異なります。碁盤は、縦横 19 本のマス目の線が立体的に盛り上がり、碁石の裏には溝があって、碁盤に固定できる仕組みや黒と白石を区別するために、黒石には小さな突起があります。対局中は、相手の着手音を聞いたら、碁盤を手で辿りながら探し、頭の中の碁盤に一手一手入力しながら進めていきます。

元々囲碁は頭の中で、手を読んで着手するゲームだとしても、一局丸々覚えながら打つことは相当疲れると思われま

す。また違う相手に対局を申請してすぐ練習対局に入ります。対局の後、韓国選手に疲れませんかと聞いたら、「疲れるけどオフラインで囲碁を打つ機会がなかなかないし、こんなに相手がいるのも嬉しくて…」と答えてきました。韓国では、視覚障害者囲碁は活性化されていませんので、できる限りもっと対局を楽しみたいということでした。

あの姿を見ながら、囲碁を楽しく打ったのはいつだろうと自問しました。勿論、私にとって囲碁は職業だったので、状況は異なるかもしれませんが、いつの間にか囲碁自体の楽しさより勝負に関することが大きくなったと思います。しかし、棋士ではなく大学院生として訪れた私は、囲碁の愛があふれる空間のおかげで、いつの間にか彼らの囲碁を見て一喜一憂しながら同化され、初心に戻って楽しんでいました。おそらく、この時の感情は、身慣れていた空間の安定感と対局の緊張感から感じたものかもしれません。とはいえ、1 泊 2 日間参観しながら改めて思い知ったのは、やはり囲碁は打つ過程は楽しいし、勝ち負けが全部ではないということであり、私の囲碁観を振り返ってみるきっかけになりました。この度の経験がこれから囲碁、そしてレジャーを研究していく道のりの中、貴重に生かしていきたいと考えます。



<エッセイ>

## ジェンダーギャップと「地図が読めない女」の 関わりから思うこと

竹内 謙彰

10月の下旬に、TV番組「林修先生が驚く初耳学」のディレクターという方から、このエッセイのタイトルに書いたようなことで電話取材の申し込みがあった。ずいぶん以前に「空間能力の性差は生得的か？」と題する論文<sup>i</sup>を書いたことがあるので、そこから私にたどり着いたらしい。取材では、最近出た海外の論文で、男女で地図読みの能力に違いがあるのは、ジェンダーギャップが関係しているとの結論がでていることなどについてコメントをほしいとのことであった（脳の性差についても聞かれたが長くなるので省略）。残念ながら、その時にはその論文のことを知らなかったので、「論文のことは知らない」と正直に答えるとともに、相関的研究からは生得的な差なるものを否定はできない（もっとも生得的に性差があることを立証することも難しいのだが）ものの、社会的処遇が地図読みのようなスキルのジェンダー差を広げる要因になりうること、まして、かつてよく売れた本のタイトルにあったような「地図が読めない女」などという決めつけは適切ではない、といった話しをした。

前置きが長くなったが、せっかく取材を受けて興味を抱いたので、当該の論文<sup>ii</sup>を検索して見つけ出し早速読んでみ

た。使われている課題は、インターネット上からダウンロードできるゲームであり、提示された地図上の掲示番号が振られたチェックポイントを記憶して、水路をボートによってたどることや、ゴールにたどり着いた後、出発点の方向を三つの選択肢から選ぶことが課題となる。ゲームの名まえはSea Hero Quest (SHQ)、ドイツテレコム社が開発したものでアルツハイマー型認知症の基礎研究データ収集のためにインターネット上に無料で公開されており、誰でもダウンロードして楽しむことができる。ただし、研究の必要から、性別や年齢など人口統計学的な情報を入力することが任意で求められる。私自身もダウンロードして、早速プレイしてみたが、それなりに楽しめるゲームである。

今回の論文は、Sea Hero Questによって収集された世界各国の18歳から99歳までの約250万人分のデータに基づき、ナビゲーション能力が各国の経済力やジェンダーギャップなどどのように関連しているかを分析しているものである。ただし、人口統計学的情報を提供してくれているのは全体の57.6%にとどまっていることや、ゲームの遂行においてナビゲーション能力が最低限分析可能であるレベルまで到達しているこ

などを考慮し、実際に分析の対象となったのは、57カ国の558,143人であった。この57カ国の内には、残念ながら日本は含まれていない。

さて、分析の結果、いくつかのことがあきらかになったが、ここで紹介すべきもっとも重要な点は、性別による社会的不平等の指標であるジェンダーギャップ指数 (Gender Gap Index; GGI) が、ゲームで測定されたナビゲーション能力の国別の性差と統計的に関連が深い (比較的強い相関がある) ことであった。なお、ジェンダーギャップ指数 (GGI) が、ナビゲーション能力の性差を統計的に有意に予測するとともに、国民一人当たりの国内総生産 (GDP per capita) が、その国民の平均的ナビゲーション能力を予測することも明らかになった。わかりやすく言えば、国民一人当たりの経済的豊かさが高いほどその国民のナビゲーション能力が高くなる傾向があること、ならびに、国のジェンダーギャップが小さいほどその国におけるナビゲーション能力の性差が小さくなる傾向があるということである。

主要な結果は以上である。「たかがこれだけ」と思われるかもしれないが、数十万人規模のデータに基づき、ジェンダーによる処遇の差がナビゲーション能力の性差をもたらす (拡大する) 可能性を示しただけでも大いに意義があるといつてよい。あくまで相関に基づく分析ではあるが、社会的処遇の差が能力の差を生み出しうることは十分納得できることなのだ。国別比較を行うこうした相関分析は、時に社会的・政治的インパクトをもたらす結論を導きうるものである<sup>iii</sup>。ところでわが国のジェンダーギャップ

の現状に思いをはせると、情けない気分

に襲われる。日本のジェンダーギャップ指標の国際ランキングは、2017年公表時点で144か国中114位、国の経済力との関係で見れば絶望的なまでに低いといつてよい。なお、この原稿が掲載される頃には2018年のランキングが発表されているだろう。いくらかでも改善されていけばよいのだが。

個人的なことだが、ここで思い出したので書きとどめておきたい。2004年にロンドンに滞在していた際に、自分が作成した「方向感覚質問紙簡易版」を、滞在先大学の学生に実施させていただいたときの結果である。因子構造は、日本で調査したときとよく似ていたが、日本での結果と明らかに違っていたのは、方向感覚の自己評定に統計的に有意な性差がなかったことである。少なくとも、そのときに調査に協力してくれた学生たちの間で、自分の方向感覚 (あるいはナビゲーション能力) に関して、自己評定に男女の差がなかったということだ。しかし、今日の日本では依然としてジェンダーギャップが大きいことを考えると、おそらく日本で今この質問紙を実施しても、きっと、いまだに性差が見出されることだろう。今回紹介した研究で用いられた Sea Hero Quest でも、大きな性差が見出されるだろうと予想される。

ジェンダーギャップの解消という点で、日本は長く同じ場所で足踏みしたままだったのではないか。女性をもっと社会で活躍すべきだとの声はあれど、そのために必要とされる施策の充実は間尺に合っていない。たとえば、保育所の数は絶対的に足りない状態が続いている。本学の衣笠とBKCで学内保育所を開設できたのは、ほんのささやかなことではあ

れ前進だろう。また、社会の様々な場面で、重要な決定をおこなう組織などでは、圧倒的に男性の数の方が女性より多い。私たちの学園もまた同じである。決定権のある組織において、女性の比率を増やす必要がある。言い換えれば、いびつな男女比を是正していく必要がある。さまざまな領域で平等化が進めば、先述したような能力の開花におけるジェンダー差も、おのずと解消していくに違いない。

とはいえ、更に一言付け加えれば、男女格差の解消を目指すことは、本質的には、何かのためではなく、平等であるこ

とそのものが価値であるからだ。もちろん、男女格差の解消が、新たな働き手を生み出すこととか、多様な視点を導入することで創造性が発揮されるようになるであるとかといったことを期待するように、何かの手段でありうることを否定するつもりはない。しかし、「そうしたことのために」ということを強調すると、例えば別の手段でも達成できることがわかれば、男女格差の解消の必要性が減じることにもなりかねない。男女格差の解消それ自体が達成されるべき理念的な目標だと思うのだが。

---

<sup>i</sup> 竹内謙彰 (1994) 空間能力の性差は生得的か? 心理科学, 16(2), 61-75.

<sup>ii</sup> Coutrot et al. (2018) Global determinants of navigation ability. *Current Biology*, 28, 2861-2866.

<sup>iii</sup> 社会的・政治的インパクトをもたらす国別比較の相関分析として思い出されるのは、ずいぶん以前に医学雑誌 *Lancet* に掲載された、国民総生産(GNP)に占める軍事費の割合と乳幼児死亡率の相関関係を示した研究である。これとて、因果関係を立証したものではないが、軍事費を増やすことが、乳幼児の生活環境に関わる施策への出費と相反する関係になりがちであることは示唆される。「次世代の未来を保障することと戦争準備は相容れないものだ」、これが、そのときこの論文に接して強く感じたことである。Woolhandler, S. & Himmelstein, D. U. (1985) Militarism and mortality: An international analysis of arms spending. *Lancet*, 325(8442), 1349-1406.